

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02784

研究課題名(和文)古英語・中英語における目的語移動の可能性と左周辺部構造に関する研究

研究課題名(英文)Object Movement and the Left Periphery in Old and Middle English

研究代表者

柳 朋宏 (YANAGI, Tomohiro)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：70340205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：古英語では3種類の目的語移動が利用できたと論じた。それぞれの操作により目的語は異なる機能範疇の左周辺部に移動する。vP領域では統語的要求により目的語が移動する。TP領域ではかき混ぜタイプの目的語移動が比較的自由に適用される。CP領域では談話的要求により目的語が移動する。左周辺部(話題領域)は談話標識により焦点領域と区分される。

古英語の否定文では否定的不定辞は否定極性項目として機能すると論じた。一般的に古英語の否定目的語は語彙動詞に先行する傾向にある。しかしながら、否定的不定辞を含む目的語は否定目的語ではなく量化目的語の分布に近いことを示し、否定的不定辞は統語的には数量詞的であると論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで主張されていた古英語における談話標識の役割に対して更なる証拠を提示することができた。数量詞遊離と目的語移動とを関連づけて分析した結果、数量詞遊離の機能と目的語移動の談話機能との関係性についても明示的に示すことができた。また、左周辺部への目的語移動を「統語的移動」「かき混ぜ」「談話的移動」に下位区分し、語順の多様性を多角的に分析したという点で評価できる。さらに古英語の否定文において、否定的不定辞を含む目的語は否定要素を含むが、否定目的語ではなく量化目的語と分布が類似していることは、これまでほとんど指摘されていない。この指摘は英語史における実証的・理論的研究に対する大きな貢献である。

研究成果の概要(英文)： I argued that there are three kinds of object movement available in Early English and that each movement is motivated to raise objects to the left periphery of three different functional categories. In the vP domain, syntactically-driven object movement takes place for the syntactic requirement. In the TP domain, Scrambling-type object movement is applied relatively freely. In the CP domain, discourse-driven object movement takes place for the discourse requirement: discourse markers. They separate the topic domain (the left periphery of the marker) and the focus domain.

I also argued that Negative Indefinite (NI) could function as Negative Polarity Item in Old English (OE). Both types of lexical expressions were used in negative sentences. It is generally said that in OE, negative objects were more likely to precede lexical verbs. I argued, however, that the distribution of the NI object is close to that of quantified objects rather than that of negative objects.

研究分野：英語学、英語史

キーワード：目的語移動 否定目的語 談話標識 周辺の副詞節 中核的副詞節 否定呼応 量化目的語

1. 研究開始当初の背景

生成文法に基づいた語順に関する通時の研究では、主に「目的語-動詞」語順と「動詞-目的語」語順との統語的・談話的役割の違いやその変化に焦点があてられているが、同じ「目的語-動詞」語順であっても機能的に異なる複数のタイプがあることが指摘されている (Yanagi 2008)。また、近年の生成文法による統語研究では、従属節内で観察される話題化などの主節現象についての研究が進んでおり (Haegeman 2012)、話題句や焦点句といった談話構造に関係する機能範疇を仮定する「言語地図」(Cartography) に基づいた分析が行われている (Rizzi 1997)。

Yanagi (2008) において、古英語の従属節における目的語移動の可能性と目的語と副詞との相対語順による目的語移動の分類を試した。そうした一連の研究において、発話動詞補文の他、特定の副詞節で目的語移動が可能であることを示した。また Yanagi (2014) では形容詞構文と動詞構文とで目的語が生起できる統語位置に違いがあると論じており、目的語の種類による移動の可能性を示唆している。今後はこれまでの研究 (Yanagi 2008, 2014) を発展させ、古英語から中英語においては異なる種類の目的語移動が可能であったが、時代が進むにつれ衰退したと論じる。また、異なる目的語移動を統一的に扱い、理論的な分析を試みる。

具体的には、古英語では「統語的目的語移動」「かき混ぜによる目的語移動」「談話的目的語移動」の3種類が存在していたが、左周辺部を含む統語構造の変化に伴い、これら3種類の目的語移動が段階的に衰退し、現代英語では全て消失したことを生成文法の枠組みを用いて論じる。さらに、本研究の帰結として、Haegeman (2012) 等において、目的語移動を含む主節現象が許容される副詞節は英語の歴史を通して(さらには通言語的に)普遍であることと、談話標識が左周辺部における機能範疇の主要部であることを示す。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は大きく以下の3つである。古英語の目的語移動の可能性に関しては、「従属節の節タイプの違い」「副詞の特性の違い」「動詞か形容詞かの述部の違い」という3つの視点からの予備調査を終えており、それぞれが目的語移動に関係していると論じている。さらに詳細な分析を行い、古英語から中英語にかけて、格認可による「統語的移動」、前置詞句にも適用される「かき混ぜ」、談話的要求による「談話的移動」という3種類の目的語移動が存在していたが、英語では段階的に衰退し、最終的には全て消失したことを計量的に示す。

また現代英語における従属節中の主節現象と比較し、古英語・中英語における主節現象としての目的語移動が観察される従属節が、現代英語の主節現象が観察される従属節と機能的特徴を共有していることを示し、英語の歴史における従属節の主節現象の普遍性を明らかにする。さらに「言語地図」に基づく統語研究では、文中での役割の違いから機能範疇の存在を仮定しているが、機能主要部そのものの存在については論じていない。本研究では「談話標識」がそうした機能主要部の1つであると主張する。

従属節内での目的語移動を主節現象と捉え、Haegeman (2012) を始めとする現代英語に関する研究との通時的な連続性を示し、主節現象が観察される従属節(副詞節)の普遍性を示そうという試みは、英語史研究だけでなく言語の理論的研究においても大きな貢献が期待できる。さらに機能範疇の存在を示す主要部として「談話標識」を位置づけることで、Rizzi (1997) に始まる「言語地図」に基づく研究の妥当性を示すことを目的とする。

3. 研究の方法

分析対象となる古英語・中英語の目的語移動に関する例は、古英語のコーパス York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE) と中英語のコーパス Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English 2 (PPCME2) を利用して収集する。分析対象である目的語移動が生じている統語環境は、主節・従属節のどちらにおいても、目的語が副詞を越えている場合なので、「副詞-目的語」語順もしくは「目的語-副詞」語順となる環境である。また本動詞が顕在的に移動する場合(動詞第二位文)と助動詞-本動詞構文とは、他言語の研究で指摘されているように、目的語移動に関して差異が観察されているため、本研究でも区別して論じる。

このようにして得られた目的語移動の可能性に関する用例を、「主節・従属節」「従属節の節タイプ」「目的語の生起位置」「目的語のタイプ」「副詞のタイプ」等に基づいて分類する。分類したデータに対して生成文法に基づいた分析を行うが、類似の現象が観察されるアイスランド語やドイツ語といった他言語とも比較し、より一般性の高い分析を目指す。

古英語・中英語における目的語移動に関する言語事実を整理・分類し、3種類の目的語移動の特質を明らかにし、各時代における左周辺部を含む統語構造とその変化について論じる。類似の現象が観察されるアイスランド語や他のゲルマン諸語、あるいは現代英語の従属節における主節現象との比較を通し、通時的・通言語的に目的語移動の可能性と左周辺部構造との関連について考察する。

4. 研究成果

本研究課題では、古英語では3種類の目的語移動が利用可能であったと主張した。それぞれの移動は異なる要因により駆動しており、目的語の移動先も異なる機能範疇の指定部であると提案した。3種類の目的語移動が適用される統語構造上の領域を図1に、それぞれの目的語移動の駆動要因を(1)から(3)に示す。

- (1) **統語的目的語移動**：最も述語に近い領域である vP 内での目的語移動で、統語的要因により駆動される。
- (2) **かき混ぜタイプの目的語移動**：顕在的動詞移動の領域である VP 内での目的語移動で、かき混ぜにより駆動される。
- (3) **談話的目的語移動**：動詞第二位の領域である CP 内での目的語移動で、談話的要因により駆動される。

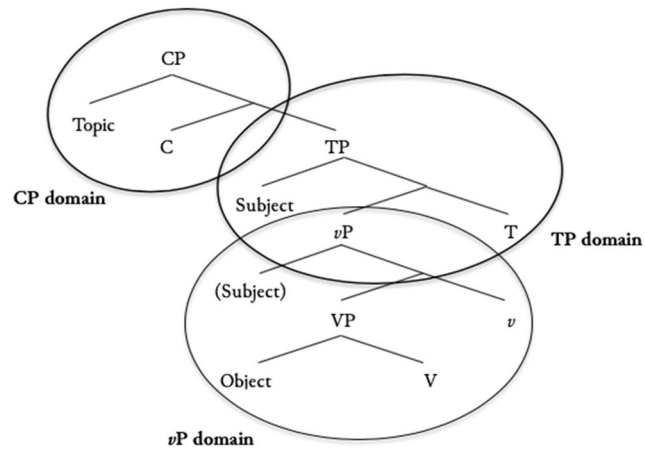


図1. 3つの目的語領域

統語的目的語移動は、vPのEPP素性により目的語をvPの指定部に移動させる。一般的に「目的語転移」(Object Shift)とよばれる現象である。古英語・初期中英語ではこのタイプの目的語移動が可能であり、二重目的語構文における直接目的語と間接目的語の分布を説明することができる。Allen (1995), Koopman (1990)によれば、二重目的語構文における対格の直接目的語と与格の間接目的語の語順は、両目的語が名詞句であればほぼ同じ分布を示している。基本語順を「間接目的語 - 直接目的語」語順とした場合、vPの主要部が格認可する直接目的語を随意的にvPの指定部、つまりvPの左周辺部に繰り上げることで、「直接目的語 - 間接目的語」語順が派生されると論じた。

かき混ぜタイプの目的語移動は、名詞句だけでなく前置詞句にも適用される移動規則である。統語的目的語移動とは異なり、付与される格の種類に関係なく目的語が繰り上げられる。つまり、対格目的語だけでなく与格目的語も移動対象となる。この移動により「副詞 - 目的語」語順から「目的語 - 副詞」語順が派生される。また、かき混ぜタイプの目的語移動は、統語的目的語移動の駆動要因である統語素性ではなく、定性のような意味素性が駆動要因である。

かき混ぜタイプの目的語移動に関して、対格目的語だけでなく与格目的語も移動の対象になることから、古英語における形容詞の与格目的語についても同様の分析を行った。分析の結果、他動形容詞の与格目的語についても、「副詞 - 目的語」語順のほか、「目的語 - 副詞」語順がある程度観察されることを示した。ただし、全体数が限られていたため、結論づけるにはさらなる調査が必要である。

談話的目的語移動は、談話標識の談話特性により目的語を繰り上げる操作である。古英語・初期中英語の談話標識 *þa* 'then', *nu* 'now' は、文頭に生じた場合、義務的に動詞第二位を引き起こす語彙項目である。Kemenade and Los (2006) は、定名詞句主語が談話標識 *þa* 'then' の左側に生起する傾向にあると論じている。一般的な傾向として、目的語は主語に先行することは少ない。そのため、目的語が定名詞句の場合でも、談話標識を越えて左周辺部に生起することは少ないが、YCOEを調査した結果、該当する用例が見つかった。

また、目的語からの数量詞遊離は、英語の歴史を通してほとんど観察されないが、目的語が基底生成位置から移動した際には遊離も可能である。古英語の主語の分布についてはKemenade and Los (2006) で既に指摘されていることだが、談話標識が話題要素と焦点要素の境界を示しており、談話標識の左側には話題要素が現れる傾向にある。同様のことは古英語の目的語についても当てはまる。主語と同じく、談話標識が節中にある場合は、目的語も談話標識の左側に生起することが可能であり、その目的語は第2の話題要素として解されると論じた。

ただし、主語と目的語の統語的非対称性のため、主語移動に比べて目的語移動の事例はあまり多くないという結果となった。一方、遊離数量詞は焦点要素になり得るという従来の仮定を考慮すれば、目的語から遊離した数量詞が談話標識の右側に生起し、目的語が左側に生起するという事実も適切に説明できることを主張した。

理由・原因を表す副詞節中における主節現象としての目的語移動

古英語・中英語における理由・原因を表す副詞節において、主節現象としての目的語移動が観察されるかどうかをYCOEとPPCME2を用いて調査した。現代英語における従属節中の主節現象の可能性は、副詞節の二分法(中核的副詞節と周辺の副詞節)により、中核的副詞節では主節現象

は観察されないのに対し、周辺の副詞節では観察されると説明される。古英語で観察される目的語移動を主節現象の一種として捉えれば、古英語・中英語の副詞節においても、周辺の副詞節では目的語移動が可能であるのに対し、中核的副詞節では目的語移動は観察されないことが予測される。そこで、古英語・中英語における理由・原因を表す副詞節において目的語移動が観察されるかを検証した。

古英語では「for + 指示代名詞 + 従属化詞」が理由・原因を表す副詞節である。この副詞節では、目的語移動が観察された。ただし、調査対象を目的語が主語の左側に現れる事例に限ったため、実例はかなり少数であった。一方、中英語では「by + cause + that」が理由・原因を表す副詞節として用いられるようになる。現代英語における because の語源であるが、現代英語の because の例とは異なり、中英語の「by + cause + that」では目的語移動は観察されなかった。目的語移動が観察されなかった要因の1つは、中英語の「cause + that」が同格構造をなしていることに関係していると論じた。また、主節と従属節の区分は段階的なものであり、話者の関与が強い節は従属節であっても主節に近い位置付けとなることを示唆した。

古英語の否定的不定辞の統語特性と「目的語 - 動詞」語順

古英語の非西サクソン方言に特有の否定的不定辞である *naenig* 'not-any' に関して、その分布を調査し、古英語の方言間にみられる否定文における語彙動詞と目的語の相対語順の違いについて論じた。調査対象を対格目的語のみに限定し、YCOE を用いたコーパス調査の結果から、否定辞 *ne* 'not' の有無が語彙動詞と目的語の相対語順に大きく影響すると主張した。語彙動詞と目的語の語順に関して、*nan* 'no' を含む否定目的語の場合には「目的語-動詞」語順がほぼ義務的であるが、肯定目的語の場合には「目的語-動詞」語順と「動詞-目的語」語順の間にあまり差はないことが示されている (Pintzuk and Taylor 2006)。これに対して否定的不定辞 *naenig* 'not-any' を含む目的語は異なる分布を示した。つまり、目的語が否定的不定辞 *naenig* 'not-any' を伴っていても、否定辞 *ne* 'not' を含まない文では、「目的語-動詞」語順が義務的であったが、否定辞 *ne* 'not' あるいは *ne* の動詞縮約形を含む文では、Pintzuk and Taylor (2006) で示された否定目的語よりも量化目的語の分布に近いことを示し、古英語の否定的不定辞は数量詞的であると論じた。

本研究課題を通して、これまで主張されていた古英語における談話標識の役割に対して更なる証拠を提示することができた。また談話標識の役割に加え、遊離数量詞と目的語移動とを関連づけて分析した結果、数量詞が遊離した際の機能と目的語移動の談話機能との関係性についても明示的に示すことができた。英語の目的語移動に関しては、副詞要素を「談話標識」とそれ以外に分類し、分析を行った。副詞を越えての目的語移動に焦点をあてた通時的研究は極めて有意義であった。さらに、左周辺部への目的語移動を「統語的移動」「かき混ぜ」「談話的移動」のように下位区分する分析は、語順の多様性を多角的に分析しているという点で更なる発展が期待できる。また、古英語の否定文における否定的不定辞は、形態的には「否定」だが、統語的には「肯定」の性質を有していることを示した。否定的不定辞を含む目的語は、否定要素を含むが、否定目的語ではなく量化目的語と分布が類似していることは、これまでほとんど指摘されておらず、英語史における実証的・理論的研究に対する大きな貢献である。

参考文献

- Allen, C. L. (1995) *Case Marking and Reanalysis: Grammatical Relations from Old to Early Modern English*, Oxford University Press.
- Haegeman, L. (2012) "The Syntax of MCP: Deriving the Truncation Account," *Main Clause Phenomena: New Horizons*, ed. by L. Aelbrecht et al., 113-134, John Benjamins.
- Kemenade, A. van and B. Los (2006) "Discourse Adverbs and Clausal Syntax in Old and Middle English," *The Handbook of the History of English*, ed. by A. van Kemenade and B. Los, 224-248, Blackwell.
- Koopman, W. (1990) "The Double Object Construction in Old English," *Papers from the 5th International Conference on English Historical Linguistics*, ed. by S. Adamson et al., 225-243, John Benjamins.
- Pintzuk, S. and A. Taylor (2006) "The Loss of OV Order in the History of English," *The Handbook of the History of English*, ed. by A. van Kemenade and B. Los, 249-278, Blackwell.
- Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook in Generative Syntax*, ed. by L. Haegeman, 281-337, Kluwer.
- Yanagi, T. (2008) "Object Movement in Old English Subordinate Clauses," *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts: The Global COE Program, International Conference 2007*, ed. by M. Amano et al., 169-183, Peter Lang.
- Yanagi, T. (2014) "Movability of Dative-Marked Objects of Transitive Adjectives in Old English," Paper presented at the 18th International Conference on English Historical Linguistics, KU Leuven, Belgium.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 柳朋宏 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 古英語における否定的不定辞 naenigの分布と否定呼応 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2 | 6. 最初と最後の頁 51-71 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 柳朋宏 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 古英語・中英語における否定的不定辞のNPIとNQの境界 - 目的語の語順を中心に - | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 日本英文学会中部支部第71回大会プロシーディングズ（オンライン） | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 YANAGI Tomohiro | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Negative Polarity Items and Negative Indefinites in the Negative Construction of Old English | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 In Memoriam of Anne Vainikka Conference Contributions | 6. 最初と最後の頁 129-135 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 柳 朋宏 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 言語接触と言語変化：現代の英語に残る他言語の面影 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 GLOCAL | 6. 最初と最後の頁 2-3 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 YANAGI Tomohiro | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Intermittence of Short-distance Cliticization in QPs: A Case Study of Language Change from the North | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Language Contact and Variation in the History of English. M. Uchida et al. (eds.) | 6. 最初と最後の頁 109-138 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 柳朋宏 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 古英語の名詞句内における形容詞の分布と統語位置 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 日本英文学会中部支部第67回大会 Proceedings | 6. 最初と最後の頁 197-198 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 柳朋宏 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 英語歴史統語論から言語の変化と不変化を探ってみる | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 日本英文学会北海道支部第60回大会 Proceedings | 6. 最初と最後の頁 145-146 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 柳朋宏 | 4. 巻 34 |
| 2. 論文標題 英語の二重目的語構文における受動化と格付与メカニズムの通時的変化 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 JELS | 6. 最初と最後の頁 227-233 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 柳朋宏 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 名詞句内におけるandを伴う形容詞の分布：共時的・通時的考察 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 『文法変化と言語理論』田中智之他編 | 6. 最初と最後の頁 247-261 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 柳朋宏 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 古英語における他動形容詞の目的語位置について | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』小川芳樹他編 | 6. 最初と最後の頁 163-180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 YANAGI Tomohiro |
| 2. 発表標題 Negative Indefinites as Negative Polarity Items in Negative Sentences |
| 3. 学会等名 ICAME 41 - Heidelberg Digital Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 柳朋宏 |
| 2. 発表標題 古英語・中英語における否定的不定辞のNPIとNQの境界 - 目的語の語順を中心に - |
| 3. 学会等名 日本英文学会中部支部第71回大会シンポジウム「英語史における「線引き」の再考 - 名詞・代名詞が関わる現象に着目して - 」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 YANAGI Tomohiro |
| 2. 発表標題 Negative Polarity Items and Negative Indefinites in the Negative Construction of Old English |
| 3. 学会等名 In Memoriam of Dr. Anne Vainikka, Conference 2019 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 柳 朋宏 |
| 2. 発表標題 古・中英語のfor/because節における目的語の生起位置について |
| 3. 学会等名 名古屋大学英文学会第57会大会シンポジウム『英語史における名詞・代名詞の実証的・理論的考察』 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 YANAGI Tomohiro |
| 2. 発表標題 A Diachronic Analysis of the Distribution of the Distributive Quantifier each |
| 3. 学会等名 The 39th Annual Conference of the International Computer Archive for Modern and Medieval English (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 YANAGI Tomohiro |
| 2. 発表標題 On the Demise of Two Types of Nonstructural Case in the History of English |
| 3. 学会等名 The 20th International Conference on English Historical Linguistics (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 YANAGI Tomohiro |
| 2. 発表標題 Object Movement and Two Topic Positions in Old English |
| 3. 学会等名 The 23rd International Conference on Historical Linguistics (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 YANAGI Tomohiro |
| 2. 発表標題 Adjectival Modification of Nouns in Old English |
| 3. 学会等名 2017 Conference of Linguistic Society of New Zealand (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 柳朋宏 |
| 2. 発表標題 古英語の副詞節における主節現象と目的語移動 |
| 3. 学会等名 第3回ワークショップ「内省判断では得られない言語変化・変異の事実と言語理論」 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 柳朋宏 |
| 2. 発表標題 英語の二重目的語構文における受動化と格付与メカニズムの通時的変化 |
| 3. 学会等名 日本英語学会 |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|